

公開講演会発表要旨

王様と鉞 —中国新石器時代の武器を考える— 近年、龍山・良渚文化の遺跡の発掘によって城壁・墳丘墓・金属器などが発見され、文明の起源に見直しを迫っている。ここで国家形成過程で生じた戦争時に使用された武器が問題となる。中国最古の武器は弓矢と鉞（マサカリ）であろう。今から6500年前に、肉厚の工具としての石斧から、刃幅が広く身の薄い有孔石鉞が分離し、武器としての道を歩む。5000年前には玉製の鉞が出現し、他の特殊な玉器と共伴する墓が散見される。これは玉鉞の儀器としての側面を示す。4500年前には孔が大きくなり、装飾が加えられ、非着柄型の鉞が誕生する。商代以後、武器の主要な座は矛・戈に譲るが、最古の権威の象徴である鉞は「王」の字も含め、各成語に今に至るまでその名を留めることになる。（佐川正敏）

遺構は語る 平城宮内裏地区の発掘調査は既に完了し、平成3年にその成果が『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』として刊行された。この報告書に基づき、奈良時代のⅠ～Ⅵ期に及ぶ内裏の構造の変遷を、主として各時期の空間構成のあり方と、その間の変化の様相に着目し検討した結果を述べた。すなわち、平城宮内裏ではⅤ期に北辺中央に皇后宮が成立し、Ⅵ期に至り北辺東隅に後宮が成立したという、文献史料では知り得なかった新たな史実を発見し、その背景に古代における女性の政治的・社会的な地位の低下と、天皇を中心とした貴族社会における父系制の導入の事実があると推定した。併せて発掘調査で検出した遺構から具体的な史実を掘り上げ、文献史料と比較検討を行うことによって古代史を再構成する新しい方法をも提示した。（橋本義則）

南中国の先史住居 —発掘遺構にみる住まいの多様性— 安志敏氏の著名な論文「于闐式建築的考古研究」（『考古』1963-2）以来、漢代以前の中国の住居は、北方が竪穴式で、南方が高床式という二元的イメージが定着してきた。しかし、その後30年間に、華南の各地で多種多様な住まいの遺構が発見され続けている。筆者は、先史華南の住居址をⅠ型（穴居）・Ⅱ型（高床式）・Ⅲ型（柱立ち平地式）・Ⅳ型（柱壁併用の平地式）・Ⅴ型（壁立ち平地式）の5類型に分け、その地域分布を示すとともに、西南少数民族建築との比較などから、それぞれの「担い手」を推定した。また、気楽な雲南起源説が横行している高床式建築については、長江中下流域の湿地帯で、稲作に先行して発生した可能性があることも指摘しておいた。（浅川滋男）

丸瓦作りの一工夫 行基丸瓦の模骨の一種に、竹などの細棒を簾のように編み束ねた模骨がある。これを使った竹状模骨丸瓦はこれまで北部九州だけに分布すると言われていたが、近年、飛鳥寺や飛鳥池遺跡で多量に出土し、大和にもあることが判明した。大和の竹状模骨丸瓦を検討すると、叩き板の種類などは九州と相違する点もあるが、模骨の構造は共通する。出土遺跡の年代などからこれらの瓦は7世紀後半のもので、九州に先行する。対応する軒丸瓦は幅広い素紋縁をもつ複弁八弁紋あるいは重弁紋、軒平瓦は三重弧紋である。これは九州でセットをなす百済系単弁軒丸瓦と二重弧紋軒平瓦とは一致しない。軒瓦の紋様などからみて、大和の竹状模骨丸瓦は百済ではなく高句麗の影響を想定すべきではないかと考えた。（花谷浩）